

地方だより

女満別地磁気観測所



一写真説明一

1. 中央二棟が宿舎。遠方に見よる山は藻琴山。この向側が屈斜路湖である。
2. 右が配電室。中央、揚水室。左、工作室。
3. 女満別地磁気観測所玄関前の吹き溜り。
4. 自記変化計室。(長嶺亘撮影)

北海道の地図をひもといて眺めると、オホーツク沿岸に一にぎりの緑色に塗られた平野が見られる。その中心が網走で、それより南西20軒ばかり入った処が女満別町である。いつか汽車の中で東京から来た人が、車窓より働く農夫の姿を眺め、「この辺でも住めば都かなあ」と感想を漏した。こと程左様に北海の果てであり、日本の果てであると考えるのは、いささか早計である。成程地理的には東京から2000軒も距っているが、文化のレベルは東京近郊の田舎よりは数等上である事を身をもって体験した。

しかし冬の厳しさは内地では一寸味えない。今年になって既に -25.6° を記録した。部屋の中でも -10° 以下にさがることは珍しくなく、こんな朝は蒲団の上に霜がおり、外では樹霜がきらきら輝いている。吹雪の時は又格別で観測室から事務室まで僅か50米の間で迷ってしまい一時間もかかってやっとたどりつくと言う例もあった。

地磁気観測所はその分布密度がヨーロッパに比べアジアは極めて小さい。国際的な協調を必要とするこの分野で、ひとりアジアのみがとり残されては如何にも残念である。戦前は豊原が唯一の北方資料の提供所であったが、戦後はこれを失い、この代替として、昭和24年、女満別に設立されたのである。現在9名で地磁気、空中電気、地電流及び気象観測を行っている。

地磁気観測業務は文化に寄与しながら、その発展に伴う人工的擾乱を嫌って、へき地に逃避行する宿命を持っている。電車その他の直流電源を用いる施設より50軒以上はなれなければ、記録に擾乱が入るのである。文化を発達させ生活を向上し豊かにするのが人間の欲求であるのに、地磁気観測所の職員は文化を発達させるが為にその恩恵に浴する事の少いへき地に住まねばならない。

厳しい気候、へき地、高い物価と云う悪条件と闘いつつ、観測員は今日も雪に埋れながら、観測に出掛けた。変化計は瞬時も停止することなく、刻々の値を記録しつづけている。

しかしながら凡ての生活条件が皆悪いと云う処もないであろう。冬はスキーヤーにとっては正に天国である。宿舎から一步出れば至る処、傾斜地あり、心ゆくばかり楽しむことが出来る。又ストーブを囲み、ハンターの手柄話に耳傾けつつ、熊の肉を肴に一こん傾ける境地は北海道でも仲間得られぬ貴重な体験であろう。

(内川規一作)